

續
遊
世
時
人
傳

2321

とくわりのりなまはけをたかきしむるは
ふるり

葉乃穂もあつたふりなむら

たふかたはくもあつたふりなむら

まやふれをたふらむ。あつたふりなむら

葉をたふらむ

拓ふりなむら

とくわりのりなまはけをたかきしむるは

ての宥悟るあつたふりなむら

細く竜門寺 盤柱御所 乃備よ不備庵と創

て今たけしむり。さあ自画賛田母たのあつた

たのあつたふりなむら

あつたふりなむら

葉をたふらむ

後作のあつたふりなむら

今のあつたふりなむら

やあつたふりなむら

あつたふりなむら

あつたふりなむら

あつたふりなむら

あつたふりなむら

あつたふりなむら

あつたふりなむら

あつたふりなむら

と城一のりの中を流るる意は氣をいしめて精神を養ふ又金銀はる
きいそ終日終夜奔走甚骨尾をうぶと憐れ美食肉をに耽る商賈を
馬を疾せしむるも初損たるを氣にするの如く或怒或悲は終大病を
類の情を憐れむ此理非明暗ともいふ世に位者たる人をして是非
不慮のふし靡然丸かた大本たる神氣を安んじ神を清く五臟を
かき毒氣を逐ひ津液を潤し大腎精を養ふ二度用て一病を治す百病
て百病を治す効能をいふるに似てはあらず

○失心風七情は効大をいせしる意はて精神を養ふに用たれぬを氣接
爽りて正神小儀するの神の色に年経たる症も用ふ酒を海ぶらうの
○癩癩の病の一種也精神の清血は實をいせざる事あり此藥大心血を清
化しれ用るに似てはあらず効能は終るはと
○肝積七情の欲抑困らるるありて肝氣鬱悶一其更は精神を憐れ

るを養ふ也此藥を用むる其症脱するごとく

- 心痛七情は切なるは心の氣血を換ず血を養ふ時忽ら死する
- 症なり此藥は用ひて精神を保護せん其痛をらむらむ也
- 健忘怔忡不寐男女老若貴賤に情欲のまをいせしるは心氣を健血を實する也
- 諸瘡瘡情欲の私を養ふと心氣は健血を實する也
- 溜飲胃中不和を飲食腐るを生ずるは心の陽氣衰する時洋を
- 世小温芳と稱する症は毒氣はたれぬ血を養ふ精神を換ふ也此藥精神を
- 君に記す諸症婦人小兒同効なりは是れ人月経滞り足氣衰する症也

○急務の風傷等風吐乳等皆諸毒其神と責る病也此は神解毒也
茶と用るんがう細粒四五箇のうらふ其功也神

○痘疹麻疹諸瘡毒一治り用るんは速に解毒に効て珍あり

○初より述べていふ茶を心氣とけり氣血を清むるの事つたてて四粒と

用て難きは患がり也○唐後世血單にも亦妙也○氣付の宜は言ふ方ん

○凡諸病を治する薬に聖劑とて海内を有るんは此の統たるも毒氣はか

と前後に茶と十四日と茶は教や用付心腕の毒事と云れ喜はれ才智の

て格育は治ひ母病は健なり又多年神治を傳ゆる教人ともて人三劑を雷を

ある事とは是る病也はらるんは茶を心氣を清むるの事つたてて四粒と

○備飲食は諸毒或は風大毒前及後毒中毒は病を治るんは

下とていふ聖藥天年龍麝の諸品とて細合とていふ或傳は

服て其効各如神

都て心脈は諸病の實は死生存亡に係る事なり其病治の程は重き症
と痛むん急は月ひく諸病を治るんは神は健は家業と誓の事病長
壽小 泰平は御代と作られたまへり

○此廓然丸先年賣出ててうり日活ふはる事と書記しをい通る
を氣に預る病症一ツとして治せとてすまを攝る病も用ひて

蓋世厚痢病の脾胃虚弱して飲食過度或風寒暑濕れ事して
らるるも亦あり又心氣虚とて脾胃の氣を行運小背常して

右の症を生ひ早く此薬を用ひてを氣とせりては脾胃石積の氣
潤て効ゆる此理也赤白青黄黒の痢病裏急後重とてり腹痛一日

小七八十度百度及び醫藥無効は九死一生の症又禁食痢とて初級
了熱はく絶食する症或疫痢兼症瘧痢兼症とて凡急症は時計

了熱はく絶食する症或疫痢兼症瘧痢兼症とて凡急症は時計

四五粒つゝ月めく結あり吾條一切の世浮清浮世唐浮の症小光表
んわり男女寒熱虚實新舊極重と関を早く用ひて試み結あり指
はしめて救へざらん故今度ゆらまう一筆して弘治二年乙未

御薬料 銀四匁五分 月ひやう白湯

皇都新町通三条下町
 本家調合所 順應堂製

